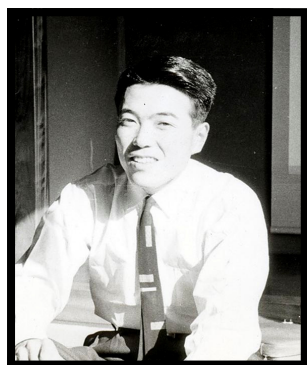


追悼文～山高里盛先輩を偲んで



<在りし日の山高里盛先輩>

山高里盛先輩は、昭和6(1931)年3月29日に広島市に生まれ、74歳の誕生日を1週間後に控えた平成17(2005)年3月23日に大分市内の病院で死去されました。これから第二の人生をエンジョイして頂きながら、学会などでも更なるご活躍・ご発展をお願いしたいと思っておりましたのに、本当に残念でなりません。

私は広島大学時代から、電子顕微鏡(電顕)分野での技術開発と応用に向けて先輩とともに一緒に仕事をしてきたという関係にありますし、原生動物学仲間では最も先輩に近い存在であったと考えております。その意味からも、本当に差し出がましいことかも知れませんが、私自身も、この場において心から哀悼の意を表したいと存じます。

思い起こせば、それは今からほぼ50年前の昭和31年の冬のことでした。当時、私達の指導教官であった柳生亮三先生が「原生動物を相手にこれから研究をして行く者にとっては、電顕も光顕と同じように必須のものになってくる」と言われたことに触発され、山高先輩と私の2人が柳生先生に同行し、東京まで武者修行に出掛けたのでした。

当時、生物学分野で電顕を扱える人は皆無に近い状態であったため、結局、柳生先生と私達の一行は、広島仕立ての夜行列車に乗り込み、18時間余りの時間をかけて東京に向かったのでした。東京では、慈恵医大の安田寛基先生を初めとし、慶応大学医学部や東京医科歯科大学の先生方の研究室(山高先輩は「道場」と呼んでいました)に次から次へと教を請いに参りました。その折に広島大学の宿泊施設であった「尚志会館」に泊まりましたが、山高先輩が大変に寒そうな姿で、でも優しく微笑みながら、火鉢を囲んでおられたときの写真がありましたので、ここに掲げておきます(昭和31年12月4日、重中撮影)。

この写真をご覧になっても納得して頂けると思いますが、山高先輩は本当に温厚篤実な方で、常に周囲の人達に気を配り、私達後輩に対してもやさしく諭すように指導して下さいました。そして、仕事の面でも電顕試料作成に欠かすことのできない繊細な心配りと、抜群の器用さと、そして新技術を次々に生み出すことのできる特技をもっておられ、私は毎日のように驚嘆しながら、先輩から教えて頂くばかりだったように記憶しております。

先輩が大学院を修了されるまでには、すでに先輩の電顕の研究が学会でも高く評価されるようになっており、当時は極めて就職難の時代であったにも関わらず、山口大学医学部の吉井善作教授から懇望されて、大学院終了後、直ちに山口大学医学部助手として就職されました。その後、日本電子(株)にも数ヶ月間、武者修行(?)に出掛けられ、電顕の組み立てから始まって、軸合わせや非点補正を含む微調整、その他もろもろのハード面での技術をも完全にマスターして山口大学に戻られ、医学部のその後の電顕保守にも貢献されました。

このことは、先輩の更なる発展につながることとなり、着々と研究業績も挙げられ、ちょうど私が3年あまりの間、留学していました米国カンザス州立大学に1年間の留学を目的に来訪され、先輩の新しいボスのジェーン・ウェストフォール教授も加えて、ご一緒に仕事を再開することができました。よほど私達は縁深い間柄にあるのだと感じ入った次第でした。

帰国されてからは、間もなくして大分医科大学教授として栄転されました。日本原生動物学会でも、昭和60年の第19回大会を大分で開催することが決定され、山高先輩は大会長として会場となった大分医科大学で抜群の大会運営能力を発揮されました。学会幹事はもとより、多くの大会参加者の方々も、その運営手腕に感銘を受けたものでした。

以上のように、山高先輩は電子顕微鏡に強く魅せられ、生物の微細構造解明に一生を捧げられるとともに、学会の発展にも大きく貢献してこられました。今後は、先生の後輩や教え子達がご意思を引き継ぎ、原生動物を初めとする生物試料の電顕の研究を発展させるため、頑張っていってくれるものと固く信じております。

山高里盛先生！どうか、安らかにお眠り下さい。

(広島大学名誉教授 重中義信)